Vol.33

令和８年５月７日
防大同窓会機関紙

小原台だより

電子版第１１号

◆学校長に聞く
◆防衛大学校関連
◇令和７年度カッター競技会について
◇令和７年度水泳競技会の観戦及び激励
◇令和７年度防衛学特論研究レポート発表会
◇令和７年度断郊・持続走競技会の激励
◆同窓生は今
◇第６９期生に聞く
◇今人生、真っ盛り（３１期生）
◆活動報告
◇令和７年度防衛大学校同窓会代議員会（実施報告）
◇第１３期生ホーム・カミング・デー２（ＨＣＤ２）
◇第４８期生ホーム・ビジット・デー（ＨＶＤ）
◇第２５期生ホーム・カミング・デー（ＨＣＤ）
◇第２８回防衛大学校同窓会テニス大会
◇第２７回防衛大学校同窓会ゴルフ大会
◇第２５回防衛大学校同窓会囲碁大会
◆会長ルーム・活動記録

◆連絡事項

◆学校長に聞く

防衛大学校長

学校長　久保文明

2026.3.13

「いわゆる「学校長要望事項」を素材として」

本年度も投稿の機会をいただき心より感謝しています。最近の防衛大学校の状況にいて、少しばかり報告させていただければ幸いです。

令和３年４月１日に学校長に赴任して数週間が経った頃のことでした。秘書から、「学校長要望事項」なるものを用意してほしいと言われました。それがどのようなものかまったく見当もつかず、ともかく当惑しました。多くの自衛隊の基地や駐屯地では、司令や師団長要望事項として掲示されているという説明を受けたような気がします。それで完全に理解したわけではなかったのですが、雲をつかむような思いをしながら、とりあえずない知恵をひねっていろいろと考えてみました。その時の「作品」が以下のものです。

（職員へ）

防大生の可能性を信じよう

（学生へ）

自分たちの可能性を信じよう

その後、これがどのように扱われているか、なかなか知る機会に恵まれませんでした。令和三年から四年にかけてはコロナ禍のため、学生舎を訪れる機会が非常に少なくなってしまいました。ようやく再開された学生舎研修の際(どの学生舎であったか記憶が定かでありませんが)、1 階の入り口近くの壁に「学校長要望事項」が掲示してあることを知りました。ここで初めて、「なるほど、このような形で学生の目に触れるのだ」ということが確認できた次第です。

だいぶ日時が経ってからのことですが、ある時たまたま話をしていた学生から、「学校長要望事項」をとても気に入っている、「あれ、いいですね」と言われました。壁に掲示してあってもそこを通る人々が注目し、また覚えてくれるとは限りません。この時、初めて少なくとも一人は見てくれ、しかも気に入ってくれていることを知りました。

つい最近になって、秘書から実は毎日出入りしている学校長室の隣の秘書室の壁にも貼ってあることを知らされました。言われてみると、確かにそこにしっかりと貼ってあるではありませんか!

灯台下暗しとはまさにこのことでしょう。学生諸君が読んでいなかったとしても責めるわけにはいきません。

この話題を持ち出した理由は、その誕生の経緯はともかくとして、これらの言葉は最近の防大の変化の様子をよく表現していて、ほぼ五年が経った今、率直に言ってわが意を得たりという感覚がないわけではないからであります。

変化の一つは学生間指導で起きました。訓練部が学生隊長など学生隊幹部の選抜にあたってパワーハラスメント的傾向を持つ学生を避けるように努力してくれました。学生もよくそれを理解しました。その結果、学年間の関係が随分変わったようです。一つの兆候は、第一学年で四月一日に着校し、同五日に入校しない学生数が、令和五年から顕著に減少したことであります。コロナ禍以前は三十人前後が、場合によるとさらに多数の着校者が早々と防大を去っていましたが、三年前からそれは十名前後まで減っています。新二学年に対する上級生によるカッター競技の体力錬成指導の中身を、奨励型に変えたことが少なくとも一つの理由のようです。それまでは、着校者は第二学年になっても上級生に厳しくしごかれている先輩たちの姿を学生寮で目撃し、衝撃を受けていた可能性があります。

四月冒頭のみならず、一学年時を通じて退校者は減少しました。その結果、たとえばコロナが猛威を揮った第四学年(第 70 期生)の学生数は 395 人(内留学生 21 人)であるのに対し、第三学年は 481 人(21 人)、第二学年は 522 人(24 人)、そして第一学年は 539 人(21 人)となっています(令和八年初め時点)。

昨年三月に卒業した 69 期生は、このような学生間指導のあり方を見直す流れに乗り、学生舎での朝の清掃を一学年にのみやらせずに、四学年も一緒に行うようにしました。四学年の間では異論もあったと聞いていますが、ともかく実施に移されました。入室要領や外出の際の容儀点検なども随分緩和されたようです。最近の学生隊長の一人が卒業文集に書いています。一学年のみが厳しく指導されるのはおかしいのではないか。

まことにもっともなことであります。

長期にわたり、学生間指導のあり方を変えるのはほぼ不可能と思われてきました。しかし、学生諸君と訓練部は、不変・不易とみなされてきたことであっても実は変えることができるのだということを証明してくれました。彼らの努力に心より敬意を表したいと思います。

学生指導とは関係ありませんが、様々な分野での学生の活躍も注目に値します。令和六年の開校記念祭から女子学生が棒引きという独自の種目を開始しました。まだ二回実施したのみですが、早くも男子学生による棒倒しと並んで目玉競技となっています。米陸軍士官学校主催のサンドハースト競技会には原則として毎年参加し、体格差に苦しみながらも善戦しています。派遣学生として選抜されるまでの厳しい訓練を考えると、志願学生の意欲には頭が下がります。イタリアのサンレモ国際人道法研究所で開催される「士官学校武力紛争法競技会」では、指揮官に要求される国際法の知識を短い時間で英語で回答することが求められます。防大生はこれに毎年参加してきましたが、令和 6 年には参加した 3 人全員が見事 2 位と 3 位で入賞しました(全員が女子学生でした)。大変な快挙だと言えます。

アメリカ、フランス、韓国の士官学校への、あるいはカタールやドイツへの語学での長期派遣は相当前から軌道に乗り成果を上げていますが、昨年からは防大の第二学年から三名がアメリカの陸海空三つの士官学校に一名ずつ合格し、現地で頑張っています。彼らはそれぞれの士官学校卒業と同時に防大の卒業証書も授与され、陸海空自衛隊の幹部候補生学校に入校することになります。

これらすべては、防大生がもつ可能性を示すものであります。

令和 3 年以降新たに導入された校外研修(インターンシップ)としてはすでに JICA および東洋文庫において実施されていますが、拡充を計画しています。防大生はどうしても防大・自衛隊の世界に閉じこもりがちですが、少しでも外の違う世界を見てもらいたいとの希望から実施しているところです。

以前、誕生日を祝う月例の昼食会が開かれていて、そこでは学生と教職員が一堂に会して学生代表が提供してくれる話を聴きました。ちなみに、この行事はコロナ期に中止になり、まだ再開されていないようです。ある時の演題は 99%と 101%というものでして、毎日行う努力の成果における達成率の差がわずか 2%であっても、前者は確実に退行し、後者は直実に進化する。その差は 1 年、3 年と経つにつれ巨大なものとなる、というものでした。とても良い話だと思いました(もっとも元ネタはある財界人が語ったことであると本人が触れていました。インターネットでも簡単に検索できます)。少しずつでも毎日着実に前進する。大事なことであります。私が防大生から学んだことの一つです。

ただ、私としては同時に、人生では 100 の地点から一挙に 150 や 200 まで引き上げてくれる瞬間や出来事もあることを指摘したいと思います。それは友人や先輩などからの一言からのこともあれば、読書から得られることもあります。もっとも確実に飛躍できるのは、外の世界、とくに外国で生活することであります。それは、長年の常識が実は常

識でないことを頻繁に教えてくれます。要は、毎日の着実な前進を実践しつつ、若いうちは機会があれば積極的に、自衛隊あるいは国の外に出るように心がけて欲しいということです。

中曽根康弘首相は、防大での卒業式で幹部自衛官たるべき防大生に対して、「永遠の求道者」であることを求めました。中曽根首相が「道」という言葉を使われたのは、「柔道」「茶道」などと同様、そこに単に技術だけでなく精神的修養と不断に高みを極める要素を認めていたからであろうと推測しています。むろん、最近は「ラーメン道」などという表現も散見され、「道」もやや安易に使われる傾向があるのかもしれません。いずれにせよ、知識や体力だけでなく、総合的人間力での前進も意味していると推測されますが、防大生には在学中はもとより卒業後も、毎日の地道な努力と同時に、一挙に飛躍する瞬間も積極的に掴みに行って欲しいと願っています。

もとより、学校側が努力すべきことが多いことも事実です。

現在、理工系を中心に一部の希望する学生について、直接研究科に進学する道が開けないか検討しています。また、これは直接には教官側に関係する事柄でありますが、数年前と比較すると防大の研究費は格段に増えており、研究機関としての防大の役割と存在意義も評価されつつあると感じています。防大自身、自らの可能性を信じてきたわけですが、それは少しずつ開花しているといえるかもしれません。さらに防衛装備庁と分業しながら、基礎的な分野の防衛研究を担う研究上の役割を強化できないかとも考えています。日本の安全保障という点でも、貢献が求められている分野ではないかと想像しています。

採用(入学)試験についても、ここ五年ほど大小さまざまな工夫をすることで、18 歳人口が減少する中、防大は何とか受験者数を確保してきました。今年度実施した入試に関しては、受験者数は微増でした。入試課の努力を多としたいと思います。もっと知恵を絞れば、より優秀な学生を確保できるかもしれません。これを考えるのは学校側の責任です。

勉強でいえば、残念ながら一定の学力差が存在するのは否めないところかもしれません。訓練や勤務態度、そして任官意欲等についても、非常に意識の高い学生もいれば、そうでもない学生も多数いるというのが実態でしょう。どの教育・訓練機関にも存在する問題かもしれませんが、指導する側にとって、やりにくい状態が生まれているようです。このような状況でよくある対応方法は、どちらかを切り捨ててしまうことかもしれません。とくに、意識の高い学生からの問題提起に対して、「他の学生はついていけないからダメ」と言って却下し、結果的に自衛隊に最も必要とされている優れた潜在的指導者を失望させてしまうことは、もっともあってはならないことです。両立が難しいのは否定できません。しかし、我々防大は教育・訓練の専門組織、いわばそのプロである以上、両方に目配りするように全力を尽くすべきではないか、と信じます。のみならず、我々にはそれをやり遂げる能力があるのではないか。そう信じたいものです。

最後に、冒頭の「要望事項」を再掲させていただきます。ただ本稿では末尾に一つ付け加えてみました。いかがでしょうか。

（職員へ）

防大生の可能性を信じよう

（学生へ）

自分たちの可能性を信じよう

(そして、防衛大学校すべての職員・学生へ)

防大の可能性を信じよう

了

◆防衛大学校関連

◇令和７年度カッター競技会激励

2025.04.29

令和７年４月２２日（火）、第７２期生による令和７年度カッター競技会が、走水海上訓練場沖で実施され、同窓会から中尾副会長が激励しました。

競技概要は例年と同様であり、各大隊４個クルー、合計１６個クルーが参加し、各大隊のクルーが獲得した点数の合計で競う「大隊対抗の部」と、クルーごとのタイムで競う「クルー対抗の部」の２つで行われました。防大の走水海上訓練場沖に設定された、回頭ブイを折り返す距離２,０００ｍのコースにおいて、各レース４艇で競います。

午前中の予選に引き続き、午後から行われた決勝では、第３大隊から３個クルーが、第４大隊から１個クルーが参加する形となり、第３大隊が「大隊対抗の部」と「クルー対抗の部」の両方を制する可能性があるなかで行われました。なお、予選と決勝のクルー構成については、漕ぎ手となる２学年の各中隊における人数差を踏まえた公平性を確保するため、昨年度と同様に「中隊の７０％以上を乗艇させ得る予選決勝編成とする」こととされ、予選と決勝のクルー構成をどのようにするかは、各大隊の思案のしどころとなります。

競技当日は晴天に恵まれましたが、決勝レースが行われた午後は、やや南寄りの風が強くなり、波がやや高くなったことから、決勝進出各クルーのとう漕技量が、より試されるコンディションとなりました。走水観音崎ボードウォークで応援するご家族の声援を受けながら決勝レースがスタート。前半はさすが決勝レース、各クルー顕著な差が出ず激戦の様相でしたが、回頭点付近から徐々に差が出始め、最終的には第３大隊の３個クルーが１位、２位、３位を独占し、第３大隊が見事完全優勝を果たしました。

競技会の結果は次のとおりです。

順　位	大隊対抗の部	クルー対抗の部
優　勝	第３大隊	第３３Ｂクルー（１４分１９秒）
第２位	第４大隊	第３１Ａクルー（１４分３８秒）
第３位	第２大隊	第３４Ｂクルー（１４分４７秒）
第４位	第１大隊	

表彰式は記念講堂で行われました。

大隊対抗の部では、久保学校長から優勝大隊である第３大隊に対して、表彰状、優勝旗、そして学生舎玄関に掲げられる「カッター競技会優勝大隊」の顕彰板が授与されました。クルー対抗の部では、優勝から第３位のクルーに対して、久保学校長から表彰状が授与され、中尾副会長からはメダルが授与されました。なお、表彰式の中で、授与されたメダルは防衛大学校同窓会から寄贈された旨のアナウンスがありました。

最後に久保学校長が訓示され、完全優勝という素晴らしい成績を収めた第３大隊の成果を称えるとともに、他の大隊も７年度は始まったばかりであり、以後行われる競技に全力で取り組むことを期待すると述べられました。

決勝レース出発時の激励

優勝クルーの櫂立

優勝クルーの歓喜！

表彰式でのメダル授与

（総務部　３３期海　髙田　充　記）

◇令和７年度水泳競技会の観戦及び激励

2026.09.19

令和７年９月３日（水）、令和７年度防大水泳競技会が開催され、同窓会を代表して城殿副会長が観戦及び激励をしました。当日は薄曇りで残暑厳しい折でも時より爽やかな南風が吹き込む良好なコンディションの中、選手達の力泳と、これを支える各大隊の熱を帯びた応援により、大会は大いに盛り上がりました。

リレー競技の充実により大隊対抗をより盛り上げる工夫に加え、泳力が優れない学生でも競技会に参加できるよう昨年度から設けられた「５０ｍ期別レース」（７２期生であれば、７２秒にできるだけ近いタイムで泳ぐ）や、今年度は各学年（７０期～７３期）１名の４名のチームで各期の数字を合計した２８６秒を標準タイムとして競う「２００ｍ期別リレー」を新種目として加える等、更に工夫をこらした大会となりました。

競技結果は、中隊対抗リレーでの好成績や水球競技でも優勝した第３大隊が見事優勝を飾り、２連覇を達成、以下第１大隊、第４大隊、第２大隊の順となりました。

表彰式は、記念講堂において全学生・職員が参加して行われ、競技会会長である久保学校長から「大隊対抗の部」と水球競技で優勝した第３大隊に対して賞状と優勝旗、そして学生舎玄関に掲げられる顕彰版が授与されました。また、「中隊対抗の部」の優勝チーム及び「個人の部」の優勝者に対しては、城殿副会長から同窓会寄贈のメダルが贈呈されました。続いて、城殿副会長が講評を行い、最後に久保学校長が訓示を述べて大会は終了しました。

（総務部　３３期海　髙田　充　記）

久保学校長表敬

競技と応援の様子

観戦中の城殿副会長

城殿副会長によるメダル贈呈

講評を述べる城殿副会長

◇令和７年度防衛学特論研究レポート発表会

令和 7 年度防衛学特論研究レポート発表会が、防衛大学校において令和 7 年 12 月 17 日 （水）1010～1630 の間で実施され、3 名の理事（中畑理事、鵜居理事、後藤理事）が校外 来賓者として参加しました。防大同窓会は、平成 24 年から学術向上に寄与するため、学生の意欲向上を狙いとして 褒賞（副賞）を贈呈しています。発表会では、陸・海・空の要員に分かれ、「統率」「国防」「戦史」「戦略」「軍事と科学技術」の５部門の優秀レポートに選ばれた 21 名（陸 10 名、海 6 名、空 5 名）が、第 4 学年（70 期）及び第 3 学年（71 期）等が聴講するなか行われた。第 2 卒論的な位置づけで行われる 特論研究の発表会は、半年間の研究成果が学生らしい幅広い視野と独創的な論理で展開さ れ、留学生は日本の学生と異なる視点、特に自国の歴史等について問題認識に基づき研究 した成果がわかりやすく発表されました。表彰は、発表会終了後に記念講堂において行われ、中谷学群長による講評の後、中畑理 事が激励の言葉を述べました。

（総務部 34 期 陸 田中一要 記）

海上要員の発表会風景

陸上要員の発表会風景

中畑理事からの激励の言葉

理事からの副賞贈呈

受賞した陸上要員

受賞した海上要員

受賞した航空要員

◇令和７年度断郊・持続走競技会の激励

2026.03.10

令和８年３月６日（金）、今年度最後の競技会である令和７年度断郊競技会(７１期３学年)及び 持続走競技会（７０期４学年)が、実施され、納冨副会長が校外来訪者として激励しました。 断郊競技は、各大隊の第３学年が７～１２名で１組のチーム（分隊）をつくり、各個人が作業服 に半長靴、背のう、水筒など約１０ｋｇの装備を身につけ、観音崎公園の一部も使用した高低差 約５０ｍ、距離６．０ｋｍのコースを集団で走るタイムレースです。競技は午前中に行われ、学生 はこの日のために約１ヶ月前から練習に励み、本番ではその成果を遺憾なく発揮した。結果は 大隊対抗の部で第２大隊が平均タイム２９分５９秒で優勝、分隊対抗の部では第３大隊の第３０ １分隊が２４分０６秒で、２位と８秒差の僅差で優勝しました。 持続走競技は、各大隊の第４学年が５又は６名で１組のチームを編成し駅伝方式で１ 人４．３ｋｍのコースを走り、タイムを競うものです。参加した第４学年は、卒業間近 の多忙な時期にも拘らず、有終の美を飾るべく訓練を積み重ね、最上級生のあるべき姿 を示しました。成績はチーム対抗の部では第４大隊第１チーム、大隊対抗の部でも第４ 大隊が個人平均１７分４８秒、２位と２３秒差で優勝しました。 競技中、沿道に学校長をはじめ学校４役、各部長等職員、先輩や後輩を応援する学生 が集まり、絶え間ない声援と応援ラッパにより、力走する第３、第４学年を後押ししま した。 断郊競技会結果 〇 大隊対抗 第１位：第２大隊（平均：29 分 59 秒） 第２位：第３大隊（平均：30 分 02 秒） 第３位：第４大隊（平均：30 分 23 秒） 〇 分隊対抗 第１位：第 301 分隊（24 分 06 秒） 第２位：第 401 分隊（24 分 14 秒） 第３位：第 201 分隊（24 分 33 秒） 持続走競技会結果 〇 大隊対抗 第１位：第４大隊（平均：17 分 48 秒） 第２位：第２大隊（平均：18 分 11 秒） 第３位：第３大隊（平均：18 分 14 秒） 〇 チーム対抗 第１位：第４大隊第１チーム（1 時間 15 分 26 秒） 第２位：第３大隊第１チーム（1 時間 16 分 31 秒） 第３位：第２大隊第１チーム（1 時間 17 分 51 秒） 最速分隊を目指して！ チームワークでの勝利を久保学校長の号砲で一令和６年度断郊競技会（70 期３学年）及び持続走競技会（69 期４学年）が、防衛大学校において令和７年３月６日（水）、断郊競技会は午前中、持続走競技会は午後にかけて 実施され、小林副会長が校外来訪者として激励しました。

今年は校内コースに変更し、陸上競技場横をスタートして競技場に戻る約 5.2Km のコースを、背嚢を背負った７名以上の分隊が気合も十二分に力走を繰り広げていました。午前中は悪天候後の肌寒い状況でしたが、今年度から初の家族観戦が行われる中、コース各所で熱い声援、応援が行われていました。

その声援に押され、早い分隊で 20 分、遅い分隊では 25 分以上かかるところもありましたが、男女問わず、遅れるメンバーを支えながらゴールを迎える光景が多く見られ、つい自身の苦い経験を思い返しながらの激励となりました。また、早い分隊には女子学生も入り、男子学生にも劣らず最後まで走り抜いた姿に感動さえ覚えました。

持続走競技会は、約 5Km のコースで５人のリレー方式で行われ、風が弱まり少し暖かく感じる天候でのスタートとなりましたが、早いチームは 15 分／人程度で走りきるなど、卒業を目前にした４学年は体力維持ができていることを確認できました。

なお、閉会式は 13 日（木）に実施され、小原台事務局長からメダル授与となりました。ゴール後の各学生の全力を出し切った若々しい姿に頼もしさを感じ、実りの多い競技会であったと感じました。

断郊競技会結果

〇 大隊対抗

第１位：第４大隊（平均：24 分 03 秒）
第２位：第３大隊（平均：25 分 15 秒）
第３位：第２大隊（平均：26 分 14 秒）

〇 分隊対抗

第１位：第 401 分隊（20 分 03 秒）
第２位：第 301 分隊（20 分 37 秒）
第３位：第 402 分隊（20 分 47 秒）

持続走競技会結果

〇 大隊対抗

第１位：第４大隊（平均：17 分 51 秒）
第２位：第２大隊（平均：18 分 10 秒）
第３位：第３大隊（平均：18 分 20 秒）

〇 チーム対抗

第１位：第２大隊第１チーム（1 時間 15 分 05 秒）
第２位：第４大隊第１チーム（1 時間 16 分 20 秒）
第３位：第３大隊第１チーム（1 時間 18 分 43 秒）

（総務部 33 期 陸 澤﨑伸二 記）

最速分隊を目指して！

久保学校長の号砲で一斉スタート

チームワークでの勝利を

抜きつ抜かれつ！

◆同窓生は今

◇69 期生に聞く　～陸自一般幹部候補生（１）～

「同期の絆と責任の自覚」

陸上自衛隊幹部候補生学校

第３候補生隊第１区隊

一般幹部候補生　陸曹長　山際　宏太

私は現在、陸上自衛隊幹部候補生学校第１０６期一般幹部候補生ＢＵ課程に入校中の防衛大学校第６９期卒業生、機能材料工学科、バドミントン部の山際宏太です。

私がこれまでの訓練を通じて強く実感したのは『同期の存在の大きさ』です。幹部候補生学校に入校して以来、私たちは厳しい環境の中で共に過ごしてきました。「肉体的にも精神的にもキツイな。」と感じる場面は数多くありましたが、その都度支えとなってくれたのはやはり同期の仲間達でした。訓練や生活を重ねる中で、自分一人では乗り越えられなかったであろう困難を、仲間とともに乗り越えることができた経験は、私にとって幹部になるうえで重要な経験となっています。

特に印象に残っているのは行進訓練です。背嚢、小銃、装具をつけて長時間にわたり歩き続ける中で体は徐々に疲弊し、足取りも重くなってきました。途中、雨が降り出し、背嚢や装具はさらに重みを増しました。自分の荷物を運ぶだけでも精一杯の者もいる中、同期の中には他人の荷物を肩代わりして歩き続けるものがいました。私は「自分も仲間のためにできることをしなければならない。」と強く感じました。実際に、前に歩く同期が背嚢を背負うのに苦労している場面に出くわしたとき、私は迷わず荷物を代わりにもち、声をかけながら一歩ずつ共に進みました。すると不思議なことに自身の疲労感も軽減されたように感じ気力がわいてきました。仲間を助けるという行為が自分の心を奮い立たせることを、身をもって体験した瞬間でした。

小隊長を担当した際には、ただ自分が歩くだけではなく周囲を気にかけ全体のペースを整える責任を負いました。声をかけて励まし、列が乱れそうになれば修正を図りました。仲間の表情や動きを観察しながら全体をまとめることは

容易ではありませんでしたが、その役割を果たすことで自分自身も大きく成長できたと感じています。仲間を意識して行動することの重要性を責任ある立場を通じて深く理解することができました。

行進訓練の終盤、目的地を目前にした時には、私自身が限界を迎えようとしていました。足は動かなくなり、吐き気や頭痛に襲われました。その時に周りの同期、分隊員が「あと少しだ、頑張ろう」と声をかけてくれたことを強く覚えています。それがなければ歩みを進めることが難しくなっていたかもしれません。同期の存在があと一歩、厳しい状況でも頑張る精神の支えとなっていると感じました。自分が助ける側にもなり、助けられる側にもなる。この相互関係こそが同期の絆の強さであると痛感しました。

さらに雨の中の行進では濡れた戦闘服や装具が体力を奪っていきました。そんな状況下でも荷物を抱えて歩く同期の姿や、互いに声を掛け合う雰囲気があったからこそ最後まで歩ききることができました。自分だけの状況では持ちこたえられなかったであろう

状況でも、仲間がいることによって「自分もやり抜こう」と強く思うことができました。

私はこの経験を通じて、同期の大切さとは単に「仲が良い」ということにとどまらず、

互いに努力し、支えあい、成長を促しあう関係にあることだと理解しました。自分の努力はもちろん必要です。しかしその努力は仲間とともにあるからこそ、より大きな力となります。自分一人の力では限界がありますが同期と力を合わせればその限界を超えていくことができます。このことを、身をもって実感できたのは何よりも貴重な財産だと考えています。

これから先、さらに厳しい訓練が待ち受けていると思います。しかし私は今回の経験を胸に刻み、常に仲間を思いやり、助け合い、ともに努力していく姿勢を忘れずに歩んでいきたいです。もちろん幹部となった後には一人で決断し、一人で責任を取らなければならない場合も必ず訪れると思います。時には孤独に耐え、部下を導き、全責任を背負わなければならない状況もあるでしょう。そのような時こそ、幹部候補生学校で培った同期の絆、共に支えあった経験・姿勢を思い出すことで、自然と周りが見え、部下の意見や支えに気づき、自分が強くなれると思います。仲間と歩んだ日々は、私が一人で立ち向かわなければならない瞬間でも必ず背中を押してくれる力になるはずです。

最後になりますが、この寄稿文を目にしている後輩達には防衛大学校では校友会や競技会、学生者生活など様々な行事があると思います。その中で一つでも何かを頑張り突き詰める習慣をつけてほしいと思います。また、同期と積極的にかかわって時にはぶつかり合ってでも良い関係を築いてほしいと思います。学生という失敗することのできるタイミングで積極的にいろいろなことに取り組んで多くの学びを得てほしいと思います。

皆さんと部隊で会えること楽しみにしています。

69 期生に聞く　～陸自一般幹部候補生（２）～

「幹部候補生学校に入校して」

陸上自衛隊幹部候補生学校

第４候補生隊第１区隊

一般幹部候補生　陸曹長　麻生　知里

全国の諸先輩方及び同期生の諸官におかれましては、ご多忙の中、日々の任務にてご活躍のこととお慶び申し上げます。陸上自衛隊幹部候補生学校・第１０６期一般幹部候補生（防大、一般大等出身者）課程に入校中の防衛大学校本科６９期卒業生、麻生候補生です。

同期とともに新たなる目標を胸に防衛大学校を去ってから早くも５か月が過ぎました。同期達と他愛もないことで笑いあったり、競技会の勝利のために本気でぶつかり合ったり、学生舎運営で共に悩んだりした日々が、今ではとても懐かしく感じます。立派な幹部自衛官になることを目標に前川原駐屯地に所在する陸上自衛隊幹部候補生学校の門を叩いたわけでありますが、幹部候補生学校に入校する１か月前から漠然とした不安感でいっぱいでした。特に、着校日前日は緊張と不安感でほとんど寝付けなかったものです。入校当初は防衛大学校の生活と幹部候補生学校の生活のギャップに戸惑うこともありましたが、防大の同期や一般大学出身の同期達と日々を過ごす中ですぐに慣れていきました。陸上自衛隊幹部候補生学校では初級幹部に必要な実員指揮能力に加え、戦術などの識能教育、高良山登山走、藤山武装障害走など伝統ある行事を通して幹部自衛官として必要な資質を涵養しています。

この度、小原台だよりに寄稿する機会を頂きましたので、「自律」と題しまして、幹部候補生学校での５か月間の生活で感じたことに焦点を当ててこの場をお借りして述べさせていただきます。幹部候補生学校に入校を控える後輩達の今後の生活を送る上での一助になれば幸いです。

幹部候補生学校で厳しい生活を送る中で、区隊長に何度も指導された内容が話の題である「自律」についてでした。指導を通じて、「自律」することの必要性と「自律」した幹部自衛官となるために必要な資質を再確認することができたので、この２点について話します。

一つ目は「自律」することの必要性です。防衛大学校では課目のない時間や昼休みなど自由に使える時間が多く存在しますが、幹部候補生学校ではそれらは存在しないため、限られた時間の中で次の日の準備や各係の業務、

整備などをしなければなりません。つまり、自分のやるべきことを確実に認識し、いつまでにやるのか計画を立てて実行することが必要になります。限られた時間の中でやるべきことをやり、個人の時間を作る必要があることから、「自律」は必要になります。

ほかにも、防衛大学校では週番学生、長期勤務学生などの業務があるように、幹部候補生学校では勤務候補生（区隊当直、内務係、学習係）と各係（教務図書、体育、同期

生会、環境美化など）があります。防大の係業務と幹部候補生学校の係業務の共通して

いる部分は、どちらも指導官や区隊長の指導の下でその業務を行うことですが、大きく違う所は幹部候補生ではただ言われた通り業務を行っても期待した成果は得られないという所です。各係は区隊全体で作業を行った時の時間や点検にかかる時間、その作業の細部着眼などの見積もりを自分自身で立て、区隊全体としてその業務を遂行しなければ、成果は得られません。ここではマネジメント能力と区隊としての「自律」が必要になります。

ここまでで個人としての「自律」の必要性や区隊としての「自律」の必要性について述べました。続いて、「自律」した幹部になるために必要な資質について三つ述べます。第一に、「優先順位」と「集中力」です。幹部候補生学校の場合、やるべきことが多く、目の前のことに順に取り組んでも自分の時間を確保することはできません。そのため、優先順位をつけて最もやるべきことから計画的に集中して取り組むことが必要です。日々このことを意識すれば自然と自身を律することができるでしょう。

第二に、「マネジメント能力」です。区隊（任官後の部隊）を律するには、相応のマネジメント能力が必要不可欠ですが、これは幹部候補生学校のみで鍛えられる能力ではなく、防衛大学校の生活でも身につく能力であると考えています。例えば、長期勤務学生や校友会の主将、競技会責任者など学生舎生活に積極的に関わっていくことで身につくと思います。長期勤務学生を断ったり、競技会に消極的だったりするとこの資質は身につかないので、意欲的に学生舎生活に関わってみてください。

第三に、「同期に関心をもつこと」です。人のふり見て我がふり直せとよく聞くと思いますが、まさにその通りで入校当初は分からないことだらけでミスもつきものですが、他人のミスから学べない者はいつまでも成長はできませんし、ましてや関心がなければミスが起こったことにも気づきません。まずは同期に関心を持つこと。そして他人のミスから学ぶことで「自律」することができると思います。

上記の内容を幹部候補生学校の入校を控える防大の後輩達へ伝えたいこととして述べさせていただきました。私の経験が少しでもお役に立てれば幸いです。しかしながら、私もまだまだ未熟者ですので、今一度、態度を見つめ直し、自分の目指す幹部自衛官像に少しでも近づけるように残りの期間も貪欲に成長できる機会を求めて精進して参ります。

69 期生に聞く　～海自一般幹部候補生～

「後輩に伝えたい事」

海上自衛隊幹部候補生学校

第７６期一般幹部候補生課程　第２分隊

一般幹部候補生　海曹長　長坂　春広

海上自衛隊幹部候補生学校 第７６期一般幹部候補生課程（Ｉ課程）の長坂候補生です。この度、防衛大学校６９期本科学生の卒業生を代表し、「小原台だより」に寄稿する機会をいただきました。そこで、「後輩に伝えたい事」と題し、入校から約半年間を通じて気が付いたこと、感じたことを綴ってみたいと思います。

まず初めに伝えたい事は、幹部候補生学校では、自分とは異なる多様な価値観に出会うということです。海上自衛隊幹部候補生学校には大きく分けて４つの課程が存在します。防衛大学校や一般大学を卒業してから入校をする一般幹部候補生課程、部隊で３等海曹、２等海曹又は１等海曹として勤務した後に入校をする一般幹部候補生課程（部内課程）、航空学生出身の飛行幹部候補生課程、そして部隊で准海尉又は海曹長として豊富な経験を積んだ幹部予定者課程です。さらに、分隊長をはじめとする多くの職員の方々との新たな出会いもあり、初対面の人は３００名を超えます。自分とは全く異なる経歴を持つ方々と関わる中で、我々防大出身者は良くも悪くも「井の中の蛙」であったことを痛感しました。間違いなく防大卒としての大きな強みがある一方で、４年間を似た価値観の中で過ごしたがゆえの固定観念も存在します。私たちは、その考えをもとに多くのことに挑戦をしてきたため、自分たちのやり方が正しいと思い込みがちです。しかし、価値観は一つではなく、それぞれの経験や立場によって大きく異なります。価値観が違えば、目指す方向や現状に対する意識も十人十色です。その中で全員を同じ目標に向かわせることは容易ではありませんが、それでも互いの価値観を尊重し合い、より多くの人がモチベーションを高く保てる環境を作ることが大切だと感じました。

次に伝えたいのは、「防大生には自信を持って欲しい」ということです。近年、防衛大学校ではハラスメント撲滅のために多くの規則や習慣が見直されてきました。その結果、ハラスメントは大きく減少しましたが、一方で「これで防衛大学校を卒業する意味があるのか」と疑問を感じる人も少なくないはずです。確かに厳しい入室要領や着こなし、ベッドメイキングやプレスなども大事ではあるものの、防大生活で得られる本当の価値はそれ以上のものです。私が半年間で強く感じた防大生の最大の強みは、「考える力」です。コロナ禍や、ハラスメント対策による指導改革という大きな転換期を経験してきた我々は、常に「どうすればより良くできるか」を考え続けてきました。従来とは異なる方法で、同じ水準を維持しようと努力したその経験こそが、防大卒業生の大きな財産です。防大卒業後、後輩たちが現状に満足せず、より良いものを目指して様々なことに挑戦している姿を見ると、私は感動するとともに、大きな安心感を覚えました。昨年、防大で講話をされた陸上自衛隊警務隊長の河口陸将補は、「一度作ったビジョンがゴールではない。変わり続けることがゴールである。」と仰いました。今の防大生はまさにその言葉を体現しているのではないかと思います。後輩の皆さんには、自信をもって防大卒業後の次のステージへ羽ばたいて欲しいと思います。

最後に伝えたい事は、「楽しむことの大切さ」です。高校を卒業して防衛大学校に入り、幹部候補生学校で日々過ごす中で、ときに自分が何をしているのかが分からなくなることがあります。防大でも同じような経験をしたことがある人は多いと思います。その際に指導官や上級生から言われることは、大抵「物事の本質や意味を理解しろ」という言葉です。しかし、物事の本質を理解するには、それ相応の経験や知識が必要であり、すぐに得られるものではありません。だからこそ私は、「どうせやらなければいけないことなのであれば、どうすれば楽しむことができるか」を常に考えるようにしています。どんなに辛いことであっても、楽しむ工夫をすれば大抵のことは乗り越えることができ、また楽しむことで吸収も早くなります。今後、私たちは日本や世界各地で大きな責任を担って任務に就く立場になります。その中で、「物事を楽しむ力」は非常に重要になると思います。後輩の皆さんにも、防大生活の中でどんなに小さいことでも自分なりに楽しむ力を養い、幹部候補生学校に進んでほしいと思います。

幹部候補生としての期間も、残すところ約半年となりました。今も日々、新たな気づきを得ながら研鑽を積んでいます。これからも、国民の皆様、そして仲間たちから信頼される立派な幹部海上自衛官を目指して、努力を続けてまいります。

そして最後に、後輩の皆さん。私たちは一足先に世界に羽ばたき、国防の任に就きます。お互い立派な姿で再び部隊で会える日を楽しみにしています。

69 期生に聞く　～空自一般幹部候補生～

一般幹部候補生（防大及び一般）

第３中隊第１区隊　坂上　巧真

防衛大学校６９期

航空宇宙工学科　陸上競技部主将

「Leader of Leaders」

１．はじめに

　防衛大学校（以下、「防大」という。）６９期航空要員卒業生を代表して本寄稿文を執筆する機会をいただけたことに感謝します。本稿を通じて、後輩達に今後の希望を与え、諸先輩方へ私たちの頑張りをお伝えすることができれば幸いです。

　航空自衛隊幹部候補生学校（以下、「幹候校」という。）の幹部候補生の課程は今年度から防大卒の B 学生と一般大卒の U 学生を一体化し、Leader を意味する L 課程となりました。B 学生と U 学生の一体化は既に始まっていましたが、B 学生と U 学生の繋がりをより強くする意味を込めて L 課程と名称が変更されました。

２．防大と幹部候補生学校の違い

　防大と幹候校の違いを教育面と生活面に分けて考えてみました。防大生は防大時代に防衛学、リーダーシップ、航空自衛隊について座学にて知識を身に付けることが多かったです。教育で学んだことを実践する場所は学生舎や校友会等のみであり、実践する機会は全員に平等ではなく、実践することなく卒業した学生もいました。また、学んだ知識をアウトプットする機会が少なく、共有する場面も少ないため知識を知識のまま終わらせることが多かったです。幹候校に入校する前の私は幹候校では防大で学んだことを復習するだけになってしまうのかと不安を抱いていました。U 学生と課程を同じくすることで授業の内容が防大時代の復習になり、新しく考えることは少なくなり幹候校の期間は足踏みをするだけの期間になってしまうのかと不安になっていました。しかし、入校後その不安を感じることは全くありませんでした。授業では防大で学んだことを実際に活用し、思考を深堀する教育を多く受けることができました。教育の内容としては、航空自衛隊の概要、統率、国際情勢を踏まえた空自の今後や統率の在り方を討論や議論を通じて考えを深め共有することです。防大時代に学生舎運営や

校友会運営で得た経験を部隊における部下指導や統率をするためにはどのようにしたらよいかとの考えに置き換える中、同期との討議等を通じ、自身の考えをより深くすることができました。加えて、U 学生と一緒に受ける訓練、教育については U 学生の自衛隊に染まっていない考え方や視点に触れることができました。ひとり一人が異なる背景を持っている中で、様々な価値観に触れ合うことができます。

続いて、生活面についてです。防大では上下ともに３歳程度しか年齢は離れておらず同世代が主に同期でした。しかし、幹候校では自身と２０歳近く離れた学生も同期として生活を共に過ごしています。部内選抜のＩ課程の方の部隊勤務の話を通じて実際の部下指導の実例を参考にすることに加え、係勤務を通して年の離れた同期に対する指導を実践する機会も得ることができました。防大時代の指導では下級生指導が主であるため社会のこともわからない、自衛隊の実情も分からない学生を相手にしていました。Ｉ課程の同期を指導していく上では、自衛隊の先輩である方に対して自身の考えの合理性、有用性を説明する必要がありました。「組織として強くなるにはこのやり方が必要である」と考えを話したときに「部隊ではこのやり方を実践していない」と衝突することもありました。防大時代の衝突とは違う衝突を何度も経験しました。幹候校に所属する全員が幹部になるため、指導の目的を理解して、目標を達成する必要があることは理解していますが、曹士を経験しているＩ課程の方には「正論だけじゃ人は動かせない」と助言をいただく機会もありました。幹部になるための教育を受け、訓練を実施してきた中で実際に部下を経験した人を初めて相手にし、学んだ知識を実践する機会を得ることができました。

３．Ｌ課程としての実情

Ｌ課程として５か月を経過した私なりの感想を述べます。Ｌ課程としてＢＵを一体化させていても課程序盤は意識の差が顕著に表れます。Ｂ学生は防大で経験した組織の一員の重要性、国防の任務の重さ、命の重さを理解しています。そのため自衛隊に求められる規則や服務の重要性を認識しています。しかし、Ｕ学生はその認識を入校後に初めて感じます。Ｂ学生がＵ学生を引っ張るということが序盤はＢ学生に対して求められることであり、積極的なリーダーシップの発揮をしていかなければなりませんでした。しかし、Ｕ学生の持つ価値観が新たな視点をＢ学生にもたらし、Ｂ学生のリーダーシップにＵ学生が追いつくことがＬ課程としてＢＵ一体化したことによる化学反応だと考えます。同じＡ幹部として今後の航空自衛隊を引っ張っていく存在だからこそ、同じ時間を共有し苦楽を共にすることができてよかったと感じています。どちらの存在もお互いを高め合うには必要な存在であり、航空自衛隊の組織力の向上には必要不可欠であると感じます。

４．最期に

防大にて一番学べたことは同期との衝突です。同期とぶつかり合って本音で話したからこそ、より深く考えることができたと感じています。自己を律して幹部となるべく考え方の基盤を確立していくことが大事だと感じました。多くの衝突を経験して何度も間違えることが一番の成長になり、価値ある防大生活にする秘訣だと思いました。そして幹侯校の課程生活の中で一番学べたことも同期との衝突です。年齢の違う同期、背景が全く異なる

同期がいるからこそ学ぶことも多く、自己の成長につながると感じました。防大、幹候校ともに同期を大事にしてこれからの課程生活にも全力で臨んでいきます。

◇今人生、真っ盛り　～３１期（陸）～（１）

「31 期生に聞く“今人生、真っ盛り
～ 31 期生の全般状況について～」

＃３１期生会長　前田忠男

同窓会の皆さん、３１期生会長の前田です。表題の貴重な投稿の機会を頂きましたの で、陸海空３１期生代表の投稿の前に、全般状況を簡潔に報告させて頂きたいと思いま す。お付き合いください。 現在、３１期生は、（再任用の数名はおりますが、）現役では内倉統合幕僚長がその 重責を遂行しています。同期生会はもとより同窓会の皆様にも声援をよろしくお願いい たします。 退官した者の多くは第二の人生を順調に歩んでおり、都道府県・ 市町村をはじめとする危機監理官・防災官等の危機管理業務に従事 する者、防衛産業・保険業をはじめ自衛隊を支える企業等で勤務す る者、間接的に国防に関与する海外企業や自営業あるいはボランテ ィア活動で活躍する者、そして、小原台倶楽部に属する防大卒業後 に民間他に就職している者がおります。また、防大同窓会・校友会 等事務局、隊友会、家族会、陸海空 OB 組織、防衛協会、安全保障 懇話会等のメンバーとして献身的に尽力しています。特に、全国各 地で行われている防大父母会や防大協力会等には講師他で参加し、 後輩やご家族等の理解と会の発展に一役買っております。 ３１期生は、上記のような環境の下で同期生相互の積極的交流と防大同窓会はじめこ れに関連する組織での貢献を続けています。 現況報告は以上ですが、結びに私が実施した千葉県防衛大学校学生父母会での講話の 写真を添付しておきます。 同窓会、期生会の皆様、引き続きのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

千葉県防衛大学校父母会

◇今人生、真っ盛り　～３１期（陸）～（２）

～杜の都通信～

３１期・陸上・山口和則

仙台で退官、そのまま大好きな仙台をエンジョイしています。

● まずは思い出を整理

第２の人生を迎えるにあたって、自衛隊での地位や常識を一度リセットするため、自衛官人生を俯瞰し、客観視できるように、これまで捨てられなかった部隊章、名札などを時系列に整理し、額装しました。

「自衛隊人生」を額装

● 仙台ライフを満喫

仙台は暑さ寒さもほどほどで、整備された自然が街中にあふれています。メジャーショップはひと通りあり、国分町"ブンチョウ"は、歌舞伎町のミニチュア版です。そして、観光地を除き、混雑や待ち行列がほぼないことも魅力的。

四季折々のイベントもあります。春はスズメ踊りで街があふれる青葉まつり、夏は七夕、秋はジャズフェス、冬は定禅寺通りのイルミネーション。街なかを走る定禅寺通りのけやき並木は、春夏秋冬異なる表情を見せてくれます。この通りに挟まれたグリーンベルトでおにぎりをいただくのが至福のランチタイムです。

定禅寺通りのけやき並木

● 東北の各地の豊かな風情を堪能

東北各地には風情のある場所と温かい人柄があふれています。

目を見張るような渓谷の紅葉、心まで温まる温泉、中尊寺などの文化遺産などを心行くまで満喫できます。その土地土地には優しい心をもった人たちがいます。必ずしも多弁ではありませんが、打ち解けて話してみると、みんな心の中に色々なものを抱えています。家族のことだったり、仕事のことだったり、震災時の苦労だったり…。

息苦しい世の中になってきましたが、東北の自然と人情は疲れた心を癒してくれます。

● 適度な距離感で TOKYO を楽しむ

とは言え、東京の空気にも時には触れたくなります。新幹線で 1 時間半、仙台は首都東京と快適な位置関係にあり、その意味でも魅力的です。

同窓会、コンサート、（当選すれば）自衛隊音楽祭りなどのイベントなど…都合さえあえば、しっかり日帰りで楽しむことができます。

たまに東京に出ると、その混雑とあわただしさには参りますが、やはり情報のエネルギーにあふれていて、まさに充電される気がします。昔通った懐かしいお店にも行けますし、お上りさんでも土地の人でもない、不思議なワクワク感で TOKYO を楽しめます。

● 自衛隊へのエール

生命保険会社の顧問という職業柄、東北各地の駐屯地を日々巡ります。

現在進行形の自衛隊の姿を、第三者の立場で見つめることができます。特に、新入隊員の団体保険説明会や入隊式に立ち会うと、志をもった若者のエネルギーを肌で感じ、身の引き締まる思いです。これも自衛隊とつながりのある仕事に巡り合うことができた特権だと思っています。

近くに松島基地もあり、たまに仕事で行くと思いがけず、青空にブルーインパルスが描くシュプールを拝める幸運もあります。

時代のスピードが速く、部隊の改編、制度改革、時代のニーズに応じた施策などに驚かされることもありますが、その中で汗を流す人には変わることのないひたむきさを感じます。

団体保険というアングルから寄り添いながら、進化を続ける自衛隊の姿を見つめながら静かにエールを送っていきたいと思っています。

● 時間を味方に趣味に没頭

急な呼集というストレスから解放され、楽しいことに没頭できるのが何よりの喜びです。

まずは、コンサート。現役時代は、半年前にチケットをとり、当日の開演直前までドキドキしながら、ツアー参戦していました。制服を脱いでからは、ビクビクすることもなく当日を迎え、終わった後も存分に余韻に浸ることができます。

読書でも有り余る時間が味方してくれます。これまでは細切れに様々な本を読んできましたが、今は、やや腰を据えて洋の東西の大作、名作をじっくり味わうことができます。

自 作 の ミ ニ チ ュ ア

趣味の分野では、ミニチュア作りを楽しんでいます。退官後、或る事がきっかけで、プレゼント用のミニチュアを作り、意外にそこそこの出来映えだったことに気を良くし、以後、たくさんのミニチュアやジオラマを作りました。工作を始めると時間を忘れます。これほど自分がモノ作りが好きだったのかと驚いています。

- これからも日々勉強！

定年後の仕事で大切だと感じるのは、自分の特性を生かせること、通勤の便、家族との時間の確保、そして”適度なやりがい”です。

城山三郎の「毎日が日曜日」で、全く何も仕事をしない悠々自適の生活よりも、適度な負荷がある仕事をして、自分の居場所とやりがいを持っていた方が幸せだということが語られていますが、まさにその通りだと感じています。

営業に直接関わるわけでもなく、ノルマがあるわけでもない。でも、駐屯地ごとに職員がいて、自衛隊ＯＢならではの部隊とのつなぎや知見でアドバイスを提供する。その中で会話を楽しむ。全体の成績が上がれば、こちらの気分も上がります。

どんな仕事も、究極は人間関係に起因する問題が焦点であり、懸案を取り巻く組織や制度を確認しながら、その枠組みの中で、できる限り全体のパフォーマンスをあげるように現実的な努力をすることに変わりはありません。これからも勉強の連続です。

◇今人生、真っ盛り　～３１期（海）～

―電気の守り、現代人の生活を守る―

海　31 期　中矢 潤

1　電験三種との出会い

私が「電気主任技術者」の道に関心を持ったのは、40 歳の頃。民間の電気工事士の友人に電気回路の問題を解説した際、「これは電験三種の理論の問題です。電験３種の資格があれば、80 歳台の人も現役で働いており、一生食いっぱぐれませんよ。」と言われたのがきっかけでした。彼の言葉に背中を押され、独学で 3 年。45 歳で電験三種を取得しました。この資格が後に、第二の人生を支える大きな柱になっていきます。

2　定年退職と最初の挫折

2019 年 6 月、海上自衛隊幹部学校の教官が最終の職で、海上自衛隊を 1 等海佐で定年退職した。海幕の援護からの紹介で入社したビル管理会社では、夜勤や長時間勤務に加え、電気主任技術者としての実務経験も積めないと分かり、2019 年 10 月に退職し次なる道を模索することとなります。

3　困難な道を選んだＭＢＡ挑戦

海上自衛隊の定年３年前、所属する部隊で英語で書かれた文章を読んで分析する仕事に従事していたこともあり、TOEIC で 700 を超えるレベルになったことから定年後の生活を見据え、「米国 MBA を取得」するか、「電験２種の取得」どちらに努力を傾注するかを思案しました。最終的に「悩んだら困難な道を選べ」という信条のもと、米国 MBA に挑戦することを決意しました。米国 MBA 取得への挑戦にあたり、横須賀市と米海軍の提携によるブリッジプログラム（約 1 年半）に参加。英語論文の書き方（アカデミックライティング）などを徹底的に学び、メリーランド大学の大学院の MBA 課程へ進学する基礎を築きました。

4　全て英語の米国ＭＢＡ履修

2019 年 10 月から 2021 年 3 月までの約 1 年半、横須賀米海軍基地内でメリーランド大学の MBA を履修しました。この MBA は、米国軍人向けのリタイアメントプログラムの側面もあるため学費も非常に良心的で、当時の為替相場を考慮しても総額 130 万円ほどで修了できました。この MBA で得た知識や視野が、後の電気管理技術者としての独立開業への明確なビジョンにつながりました。なお、メリーランド大学では、毎年 10 月下旬にニュー山王ホテ

ルで同窓会が開催されます。友人も同窓会に呼べるとのことで、今年、2025 年は防大同期の陸の飯田君に同席してもらいました。

2021 年 MBA 履修の卒業証書（チラ見せではありません！）とメリーランド大学のアレン教授との写真

2025 年 10 月 25 日ニュー山王ホテルのメリーランド大学の同窓会　防大同期陸　飯田君とメリーランド大学の教授

5　就職難とコロナ禍を乗り越えて

2020 年春、塾講師として採用が決まりましたが、コロナ禍により雇用が白紙になり　ました。そのため、三浦市役所で特別定額給付金（いわゆる 10 万円の給付）の業務に 3 ヶ月従事しました。そこでは、電話で市民からの苦情対応もすることから困窮する人々の声を聞き、「社会に役立つ仕事とは何か」を改めて考える機会となりました。

2020 年 6 月に、「電験三種・年収 400 万・残業なし」の求人を見つけ応募。住友不動産のビルの電気主任技術者として採用されました。

そこでの仕事は、ビルのサービスセンター内で勤務し、ビルの年次停電、消防設備点検等の調整、ビル内の不具合事項の解消等、海上自衛隊の現役時の艦艇の不具合事項の是正と類似点も多くありました。自衛隊での当たり前を実践したこともあり、2023 年度には住友不動産の 1000 人超の係員の中から約 20 名の年度優秀係員にも選ばれました。

住友不動産ビル係員防災センターでの勤務

6　電気管理技術者として独立

法改正により従来の「実務経験 5 年」から「実務経験 3 年＋管理講習」で電気管理事務所として独立が可能なったことから退職を決意し、 2024 年 8 月に円満退社。2024 年 10 月、ついに 40 歳の頃からの夢だった「電気管理技術者としての独立開業」を果たしました。現在は、日本テクノの協力を得て業務を開始。点検調整、報告書作成、事故分析など、自衛隊時代の経験が活かせる場面が多く、体力負担も少ない仕事です。

電気管理技術者としてのキュービクルの点検中

7　電気という“神の火”を守る誇り

電気が現代文明を支える“神の火”だと私は考えます。例えば何万人を収容するアリーナでの音響や照明を、2000 年前の人々が見たら、きっと、「神のみわざ」だと感じたことでしょう。今や AI やコンピュータも、すべて電気がなければ成り立ちません。この“神の火”を守る役目に、私は誇りを持って取り組んでいます。

8　人生 100 年時代、これからも

私は現在 61 歳。この先 20 年、80 歳を超えても電気管理技術者として働き続けたいと 願っています。自衛官としての経験、MBA での学び、民間企業での実務、そして現在の独立。すべてが繋がり、今の自分があります。

「今、人生真っ盛り」――そう胸を張って言える日々を、これからも大切に歩んでいきます。

◇今人生、真っ盛り　～３１期（空）～

「還暦の旅芸人～可能性への挑戦～」

北村　克晶（３１期　航空）

人生、90 年と仮定し、３０年を一区切りと考えると、還暦は最後の 30 年のスタート時期、余生を今までできなかったことをゆっくりと楽しむのも一つであり、別の仕事に挑戦するのも、ひとつの選択肢かと思います。茶道や武道を嗜んだ方ならご存知だとは思いますが、ラスト 30 年は、守・破・離の「離」の段階であり、私は、新たな知識・技術を開発できる創造者としての位置づけと思っています。挑戦したくとも体と頭はなかなかついてはいけないのが現状ですが・・・・

私は、前職で、指揮官・幕僚・教官職を満喫させていただき、普通の会社勤めでは、経験することができなかったことを、沢山、させていただきました。そのことを考えると、第 2 の人生は、前職では経験できなかった個人の力で勝負していく環境に身を置いてみようと思い、現在の会社に、4 年弱程勤務しています。弊社は、平均年齢も高く、再就職の方々がほとんど、５７歳で再就職した私でさえ、「新人さん」と呼ばれ、若い部類に入っていました。もちろん、70 歳過ぎても現役バリバリで仕事をしている方も何人か見かけられます。様々な方々と話し合い、組織の改善点に自ら気づいてもらい、それらを文書（報告書）にまとめるという、プロセスが、頭と体にいい影響を及ぼしているのかもしれません。

皆さんは、某トラック製造会社が試験データを改ざんし、品質不正問題を起こしたり、A ビール社がランサムウェア（データを暗号化し、解除のためには金銭が必要）による被害を被り、機能不全を起こしたりしていることは、新聞やニュースを見てご存じかと思います。そのような問題等が起きないように、製造業であれば品質の良い製品をつくり、サービス業であればお客様に喜ばれるサービスを提供し、インシデントが起きないようなマネジメントシステムが運用されているかを審査する仕事をしています。これが、「芸」の中身です。

審査員になるためには、審査員資格が必要で、例えば、品質マネジメントシステム、情報セキュリティマネジメントシステム等の講習を受け試験を受け、合格したら会社で OJT を受け、一定の力量が認められてから審査員として活動し始めました。年齢とは恐ろしいもので、若いころは記憶には自信はあったのですが、講習で教えていただいたこともすぐに忘れてしまい、「試験は大丈夫なのかな」「あと、１０年若かったら」というような思いが頭を駆け巡っていました。それでも不思議と何とかなるもので、審査員資格は取得できました。

審査対象の組織は北海道から沖縄まであり、現在は、ほぼ毎週どこかの審査に行っています。「ここの郷土料理、どこかで食べましたか」「○○にはいきましたか」とよく言われますが、夜は夜で、審査準備とか報告書作成とかで時間を要しており、なかなか、そのような時間を作る余裕は今のところありません。ただ、年に１回、富士市に行くときには、宿泊場所の部屋から富士山が見えるので、朝から爽快な気分になります。沼津市に行くときも、組織に行くまでに富士山が見えます。今年は、審査期間、全てにわたり雲がない美しい富士山を見ることができ、一緒に審査に参加した審査員に「普段の行いだね」と言われ、朝から気分よく、審査に臨むとができました。

出張先でホテルから望む富士山

また、審査が終わり、帰宅する時には駅や空港で地方の名産品を手に入れ、家族で楽しめます。福岡では、「博多通りもん」「明太子」「もつ鍋セット」、大阪では、「５５１豚まん：新大阪ではどのお店でも行列です」、名古屋は「なごやん」「赤福」、北海道では、「魚類」「じゃがポックル」「ワイン」等です。まるで、お土産のために審査に出かけていると思われると思いますが、審査内容は「守秘義務」があり、第三者には口外できないので。

ひとつだけ、言えるのは、経営者インタビューがあり、それぞれの経営者の特徴が顕著に現れます。一つ質問すると、ものすごく熱意をもって答えていただき、「他にも聞きたいことがあるのに・・・」と時計とにらめっこすること。沢山の質問に口が重たい経営者。こちらが求めていることを誰にでもわかるように答えてくださる方。といろいろなタイプの経営者がいらっしゃいます。最初のころは、緊張していまが、今は、インタビューそのものを楽しもうという姿勢で臨むと、リーダーシップに対して学ぶところが多く、大変勉強になります。

２００人規模のある経営者は、所属人員については、増やさないと言われていました。なぜかというと、家族構成等を含め、掌握できるのがそのくらいの規模だからだそうです。その方は、社員一人一人の名前はもちろん、家族構成、趣味等、詳細に至るまで掌握されていました。もちろん部下からの信頼も得ていることを私でも感じることができました。私も指揮官職に就いていた時には、そのくらいの規模が限界だと感じたことがあり、一般社会でも同様のことを思われている方がいらっしゃって少しうれしい思いをしたことがありました。

今が人生の真っ盛りかどうかはわかりませんが、前職と違う分野で働くことは、新たな発見等があり、毎日が新鮮と感じています。これからは、引き続き、芸を磨いてお客様に喜ばれる旅芸人として、精進していこうと思っています。

◆活動報告

◇令和７年度防衛大学校同窓会代議員会（実施報告）

令和７年度 防衛大学校同窓会 代議員会は、令和８年３月８日午後、グランドヒル市ヶ谷 ２階 白樺東の間において、丸茂同窓会長を始め２２２名（出席８５名、委任状１３７名） の参加をもって WEB 形式で開催されました。

代議員会の様子

代議員会の開始に先立ち、防衛大学校同窓会の丸茂会長から挨拶があり、現在の防衛大学校の近況や同窓会の厳しい財務状況見直しへの協力について言及がありました。

丸茂同窓会長 挨拶

続いての議案審議に先立つ議長選出においては、３３期空の中塚代議員からの推薦により、３０期陸の堀切さんが議長に選出され、３つの議題について審議が行われました。

堀切議長による議事進行

第１号議案の審議においては、同窓会事務局より、「令和６年度同窓会事業報告」「会計決算報告」「会計監査報告」を行い、承認されました。
第２号議案の審議においては、「令和８年度事業計画（案）」「事業予算（案）」が承認されました。
第３号議案の審議においては、「令和８年度同窓会役員の選出」について、会長に２７期丸茂さんが留任される等の案が承認されました。

その後、今年度で退任する３０期空 竹平理事及び２７期空 藤永会計監事が紹介され、同窓会の充実発展へのご尽力に対して感謝と労いの拍手が送られました。
休憩の後、本部事務局より、「同窓会会費納入の状況及び今後の資産見積」「令和７年度の事業の実施状況」「経費執行の大幅な見直し」について報告されました。
小原台事務局長からは、「防衛大学校の現状と取組み」についての紹介があり、学生全般の状況、特に女子学生の状況や、交友会活動の状況、第５大隊制への移行及び留学生交換プログラム等についての説明がなされました。
更に、本部事務局から「防衛大学校同窓会ホームページ」へのアクセス要領について説明が行われました。

代議員会に引き続き、前統合幕僚長、吉田圭秀様による記念講演会が開催されました。

講演中の前統合幕僚長・吉田圭秀さま

「世界的な分水嶺に立つ国際社会と我が国の安全保障 ―大国間競争と大国間政治の狭間で―」、という演題で講話が行われました。
これまでの国際社会及び国際政治について過去の歴史も踏まえ、緻密かつ的確に分析され、これからの我が国の安全保障について述べられました。特に現在の国際社会はリアリズム的方向に向かっているものの、リベラリズムとの二項対立として論じられるものではなく、リベラルな国際主義との均衡を図りつつ、現実的な対応を行う必要があるとのお考えを述べられました。
また、これからの少子化に際し、AI による人にとって代わる業務が推進されるものの、自衛隊におけるリーダーシップについては、AI には行えない極めて重要なものであることに言及されました。まさに自衛隊における、自衛官のリーダーシップの重要性について今後益々重要となることを強調され、前統合幕僚長としての卓越した知識と貴重な経験談について拝聴することができました。

起案・文責 ３３期 総務 樋山 謙一郎

◇第１３期生ホーム・カミング・デー２（HCD2）

１３期生ホーム・カミング・デー２（以下、ＨＣＤ２という。）が、令和７年４月４日（金）、５日（土）、第７３期生等の入校式への学校長招待行事等として実施されました。

今年のＨＣＤ２は、入校式前日の４日に１３期生主催による懇親会が開催され、５日は入校式典参列、顕彰碑献花式、観閲式参観及び校内見学が実施されました。

１３期生は、準備実行委員会を中心に、防大等との諸調整を経て綿密な実施計画を作成するとともに、参加者への案内、懇親会場やバスの準備等、約１年に及ぶ準備期間をかけてこの日に備えてきました。

入校式前日の４日（金）には「セントラルホテル横須賀」において懇親会が実施され、ご家族を合わせて１２４名の方と来賓３名が参加されました。

懇親会会場入り口横の壁には、これまでに亡くなられたご同期の学生時代の写真が掲示されました。

まず、懇親会の冒頭で殉職者５名を含む８４名の亡くなった同期の方々に届くよう、参加者総員で学生歌を斉唱した後、黙とうが行われました。

その後、内山委員長の挨拶に続き、久保学校長及び丸茂同窓会長が祝辞を述べられました。

内山委員長挨拶

学校長挨拶

同窓会長挨拶

牧本副委員長による乾杯

そして、牧本副委員長の音頭により乾杯が行われ、懇談に移りました。陸海空ごとテーブルに分かれた着座式の懇親会でしたが、話が盛り上がるにつれお互いにテーブルを行き来し、学生時代に戻り様々な話題で大いに盛り上がりました。

また、余興に新宮領夫人によるオカリナ演奏や１３期生のご主人を亡くされたご遺族の近況報告が行われ、話は尽きない状況でしたが、予定の時間が迫ったため、参加者全員で逍遥歌を斉唱し、山下副会長による挨拶に引き続き、万歳三唱をもって懇親会はお開きとなりました。

余興（オカリナ演奏）

ご遺族による近況報告

逍遥歌斉唱

山下副委員長の挨拶

４月５日　本科第７３期生等入校式、献花式等

４月５日、晴天に恵まれた満開の桜の下、７時３０分に防大正門前に集合した１３期生会の役員は、防大防衛学教育学群職員（制服自衛官）の周到な準備の下、ＨＣＤ２参加者受け入れのため受付の配置につきました。

７時５０分から専用借上げバスによる馬堀海岸からのピストン輸送が開始され、ご家族を含め１５１名のＨＣＤ２参加者は続々と防大に到着しました。防大正門での招待状の確認後、入校式参列の父兄等と入門通路を分けるなどの工夫や１３期生の案内係と防衛学教育学群職員の誘導により、控室が用意された防衛学館までスムーズに入場できました。

正門の受付

防衛学館での受付

防衛学館の控室

防衛学館には、陸・海・空の要員毎に受付が設けられ、出欠の確認後、青いリボンを受け取って控室に入り、久しぶりに防大を訪れたことで思い出話に花を咲かせました。

８時４０分、防衛学教育学群職員の引率により学校長との記念写真を撮影するため時計台に向け移動を開始しました。

９時００分、時計台下階段で久保学校長、久澤副校長、３６期生の藤岡副校長、４０期生の東訓練部長及び４１期生の中谷防衛学教育学群長とともに、参加者全員で記念写真を撮影しました。

久保学校長を囲んでの記念写真

写真撮影後、入校式典会場の記念講堂に入り、学校側のご配慮によりHCD2 参加者のために準備された１２５名分の区画に着席しました。

入校式は、１０時の本田太郎防衛副大臣の臨場、防大儀仗隊による栄誉礼で始まり、国歌斉唱、任命・宣誓・申告に続いて、学校長式辞、防衛副大臣訓示、統合幕僚副長による来賓代表祝辞と進められました。

久保学校長の式辞では、留学生を含むすべての新入生に対するお祝いの言葉と、本田副大臣をはじめとする多くの来賓の方々や新入生のご家族に対するお礼の言葉が述べられました。

そして、ＨＣＤ２行事についても言及され、この入校式に６０年前に入校された防大卒業生の第１３期生が参列していることを紹介し、「長年の国防へのご貢献、まことにご苦労様でした。」と述べられました。

この学校長のお言葉に対し、第１３期生の方々はその場で起立をされ、応えられました。

１３期生を紹介する学校長

学校長の紹介に起立で応える１３期生

また、学校長は自衛隊が信頼できる組織として高い評価を得ていることは、戦後の民主社会日本において自衛官のあり方を模索してきた１３期生を含む先輩自衛官の努力の賜物であると述べられました。

なお、人数制限のため式典会場には入れなかった２６名は、防大のご配慮により防衛学館にて配信映像を観覧することができました。

入校式終了後、ＨＣＤ２参加者は顕彰碑を参拝、献花を行い志半ばに国に殉じたご同期の殉職者に対して黙祷を捧げました。

陸海空代表による献花

総員での黙とう

その後、参加者は陸上競技場に移動し HCD2 参加者のために用意された席に着き、学生隊のパレード、陸海空自衛隊機による祝賀飛行、儀仗隊のファンシードリルなどを見学しました。

観　閲　式

校　内　見　学

観閲式の参観を終えた参加者は、希望者のみ校内見学を実施し、職員に資料館および学生舎を案内してもらいました。そして、名残を惜しみつつ、それぞれ母校を離れ家路につきました。

おわりに、ＨＣＤ２実施に向け準備を進められた、第１３期ＨＣＤ２準備実行委員会の皆様のご活動に心から敬意を表しますとともに、準備から本番まで、本当に親身になってご支援をいただいた防衛大学校職員の皆様に心から感謝申し上げます。

（同窓会事務局ＨＣＤ２担当　３２期海　佐藤広憲　記）

◇第４８期ホーム・ビジット・デー（HVD)

2025.11.22

・本年11月8日（土）晴天下、防衛大学校にて顕彰碑献花式が執行され、丸茂会長が同窓会を代表して
献花と弔辞により哀悼の誠を捧げました。
・翌日9日（日）曇天下、第73回開校記念祭が挙行。宮崎防衛副大臣が祝辞を上奏され、丸茂会長が祝賀会を万歳三唱にて締めました。
・「棒倒し」は第４大隊が20年振りに優勝。女子学生「棒引き」決勝は雨天中止
・会長は、同日に開催された同窓会会食及び48HVDでも参加同窓生への謝意激励並びに韓国士官学校に1年間留学中の現役学生の評判と活躍を紹介され、現役を支援する同窓会費の未納者への会費上納の振作をされました。

（同窓会支援者：小谷、伊藤、澤崎、宮本、篠村、西川、田中、松坂）

同窓会費による顕彰碑供花

48 期卒業生からの目録進呈

英霊１１８柱に対する献花

同窓会費で賄う同窓会会食での会長謝辞

儀じょう隊による英霊への捧げ銃

献花式後の同窓会会食状況

今後2年間の司会を決意
表明する小谷総務部長

同窓会費による顕彰室顕彰版寄付

祝賀会での宮崎防衛副大臣の祝辞

訓練展示での組匍匐前進の様子

女子大隊学生長指揮による観閲行進

懇親会での乾杯

後輩学生の観閲行進を見入る48HVD面々

海外在住同期のメッセージ

◇第２５期生ホーム・カミング・デー（HCD）

2026.03.24

２５期生ホーム・カミング・デー（HCD）

２５期生ホーム・カミング・デー（以下ＨＣＤという。）が、令和８年３月１４日（土）、防衛大学校令和７年度卒業式典（本科７０期生等）への学校長招待行事等として実施されました。
例年同様、今回のＨＣＤも卒業式の実施日がその直前まで分からない状況での準備でしたが、卒業式がいつになっても柔軟に対応できるよう防衛大学校との綿密な調整のもと、準備委員会として５回にわたる実行委員会等を行いつつ周到に準備を推進しました。３月１４日（土）は卒業式典に参列するとともに、顕彰碑献花式、観閲式見学、防大ツアー等を行いました。同日夕方、２５期生会総会・記念懇親会を開催し、ＨＣＤ関連全ての行事を滞りなく円滑に実施することが出来ました。特に今回は同伴ご家族だけでなく、故人となられた方々の奥様が４名参加され、ご主人との思い出に花を咲かせておられたのには深い感銘を受けました。

本科第７０期生等卒業式

３月１４日（土）当日は、好天のもと、２５ＨＣＤ実行委員の方々が配置に付き正門及び防衛学館内において受付を開始しました。０８３０からの全般説明に続き、時計台近傍の階段で久保学校長等ご臨席のもと２５期生及びご家族全員の記念集合写真が行われ、その後殉職者顕彰碑において２５期生代表者による献花式が執り行われました。終了後、２５期生及びご家族のうち約１５０名の方が卒業式会場に入場し、会場に入りきれなかった一部の方は防衛学館において配信映像の視聴にまわり、その後入れ替わりを行い任命・宣誓式まで観覧しました。
卒業式は高市内閣総理大臣への栄誉礼で式典が開始され、卒業証書授与、学校長式辞に引き続き、高市内閣総理大臣、小泉防衛大臣、北岡ＪＩＣＡ代表からの来賓祝辞と進められました。特に学校長の式辞の中では卒業生である２５期生がＨＣＤとして卒業式典に参列されている旨の紹介があり、２５期生の方々はその場で起立をされそのお言葉に応えられました。

実行委員会風景

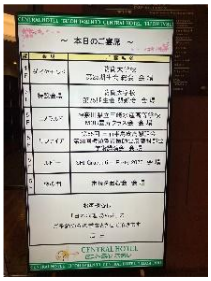
久保学校長を囲んでの記念写真

顕彰碑献花式

卒業式典、任命・宣誓式の後は、観閲式、展示飛行を観覧、最後に校内ツアーで資料館、学生舎を見学、売店でお土産等を購入後、母校を後にしました。

25期生会総会・記念懇親会

卒業式同日の１４日（土）夕方、横須賀セントラルホテルで総会及び懇親会が開催されました。
１７時前から、逐次期生会員とご家族が集まりだし、期生会総会では高鹿会長のご挨拶、１１年後に実施予定のＨＣＤ２の紹介等がありました。総会冒頭、逝去された同期生の方々の学生時代の写真を映し出して黙祷が捧げられ、総会の後、引き続き、各大隊ごと集合写真を撮影、その後、懇親会が始まりました。



ホテルの看板

期生会総会風景

大隊ごとの集合写真

１大隊

２大隊

３大隊

４大隊

懇親会では、まずＨＣＤ実行委員長でもある高鹿期生会長から、ご挨拶と２５ＨＣＤに対する防衛大学校及び同窓会からの各種支援に対する謝辞がありました。
また、来賓を代表して、藤岡防大副校長から２５ＨＣＤに対する祝辞が述べられた後、丸茂防衛大学校同窓会長の祝辞及び祝杯をもって懇親会が開始しました。祝杯後、各テーブルでは歓談の輪が広がり、ご家族を含め皆様は楽しい時間を過ごされました。
終盤には、応援団リーダー部団頭だった杉山様の口上から始まり、参加者が輪を作り肩を組んで逍遥歌を斉唱し宴も最高潮に達して、懇親会は大盛況のまま幕を閉じました。

丸茂同窓会長の祝杯

懇親会風景

杉山団頭によるエール

逍遥歌斉唱

最後になりますが、２年間に及ぶＨＣＤの準備・実施に当たられた高鹿期生会長はじめ２５期生の
実行委員の方々のご尽力に敬意を表するとともに、今回研修をされた２６期生及び２７期生の次年度、
次々年度のＨＣＤのご成功を祈念申し上げ締めくくりたいと思います。

２５期ＨＣＤ実行委員の方々

ＨＣＤ参加者
卒業式 卒業者１５５名 同伴者８０名 計２３５名
懇親会 卒業者１５５名 同伴者６５名 計２２０名
最遠方参加 北：北海道北見市、南：鹿児島県鹿児島市
(防大同窓会本部事業部ＨＣＤ担当 ３３期宮本、３４期西川)

◇第２８回防衛大学校同窓会テニス大会

2025.06.10

令和７年５月１６日（金）、第２８回となる防大同窓会テニス大会が「有明テニスの森公園」で開催されました。有明テニスの森公園は日本におけるテニスの聖地とされる場所であり、アマチュアからプロまでテニスプレーヤーであれば一度は有明コロシアム（センターコート）に立ってみたいと夢見る有名なところです。 大会会場はベテランプレーヤーの足腰にも優しいオムニ（砂入り人工芝）で、全国的にも珍しい砂も芝も目の覚めるような「青」一色のきれいなコートが１６面広がっていました。当日は曇りがちでしたが時折陽も差し、気温はさほど上がらない絶好のテニス日和となりました。

　開会式では森岡ディレクター（29 期）の開会宣言に続き、丸茂大会会長の代理として出席した城殿大会副会長（29 期）から、始めに「大会２日前、航空自衛隊小牧基地離陸後に発生した T-4 航空機墜落事故に関して操縦者の生存を参加者全員で願いましょう」とのお言葉の後、「心に余裕をもって楽しく、くれぐれも怪我のないようプレーしましょう」と挨拶がありました。 その後、篠原レフリー（30 期）からルール説明が行われました。

有明テニスの森公園

大会開会式と参加者

城殿大会副会長挨拶

森岡ディレクター開会宣言

クラス毎優勝トロフィー

篠塚 AD（レフェリー）競技説明

宮下委員長閉会の挨拶

本大会は１期～３４期までを５つのクラス、「レジェンド」（１～９期）、「スーパーグランドシニア」（１０～１５期）、「グランドシニア」（１６～２１期）、「シニア」（２２～２７期）、「レギュラー」（２８～３４期）に分けて競技が行われました。なお、今回は参加者の関係から一時的な処置として２６期をレギュラーに移行して実施しました。

「レジェンド」は、誰もが参加し易くするため、ペア参加（申込）ではなく一人参加（申込）とし試合はダブルス戦、公平なペアの組合せのためテニス乱数表（Pro DOUBLES）を使用しました。成績は個人の勝率が高い方から順位を決定（１位～3 位）しました。「スーパーグランドシニア」は同期ペアによる個人戦とし、テニス乱数表（Pro DOUBLES）を使用しました。成績は個人の勝率が高い方から順位を決定（１位～3 位）しました。そして「グランドシニア」、「シニア」、「レギュラー」の３クラスは各期ダブルス５組による期別対抗団体戦の方式で行いました。
全国から集まった 173 名は日頃の鍛錬の成果を存分に発揮し、16 面のコートで熱戦を繰り広げ、大きな弧や鋭い直線を描く黄色いテニスボールは新緑と青いコートによく映えていました。

また、コート内ではペア同士の掛け声、コート脇からは同期の応援の声が響き渡り、そしてコート外では先輩・後輩が再会を喜び昔話に花を咲かせるなど、会場全体が同窓会ならではの和やかで、かつ終始活気にあふれていました。

大会運営は、宮下運営委員長の的確な判断のもと、森岡ディレクターのスムーズな進行、篠原ＡＤの丁寧かつ迅速な対応により、全試合が大きなトラブルや怪我もなく、計画通りに順調に進行しました。

【試合結果】　（以下、敬称略：写真は優勝者）

「レジェンド」クラス（１～９期）

・クラス担当者：７期 龍岡、９期 高間

・試合方式：異なるダブルスペアで戦い、個人の勝率を競う個人戦

優　勝	松本　勲（５期）
準優勝	渡辺　浩志（９期）
第３位	龍岡　資臣・龍岡　睦子（７期）

「スーパーグランドシニア」クラス（１０～１５期）

・クラス担当者：１４期 北村、１５期 加藤

・試合方式：同期ダブルスペアで戦い、ペアの勝率を競う個人戦

優　勝	山本　政市・湶　勛（14 期）
準優勝	渡部　定吉・白畑　英爾（11 期）
第３位	新田　豊・津田　秀敏（12 期）

「グランドシニア」クラス（１６～２１期）

・クラス担当者：２０期 千川、２１期 村田

・試合方式：各期ダブルス５組による期別対抗団体戦

優　勝	１８期
準優勝	１６期
第３位	１９期

「シニア」クラス（２２～２５期）

・クラス担当者：２４期 池川、２５期 大倉

・試合方式：各期ダブルス５組による期別対抗団体戦

優　勝	２５期
準優勝	２２期
第３位	２４期

「レギュラー」クラス（２６～３４期）

・クラス担当者：３０期 篠原、３１期 飯田

・試合方式：各期ダブルス５組による期別対抗団体戦

優　勝	２８期
準優勝	３０期
第３位	２６期

【大会役員等】

大 会 役 員	大会会長	同窓会会長　丸茂　吉成（27 期） 代理　副会長　城殿　　保（29 期）
	大会顧問	井川 宏（2 期）、龍岡 資臣（7 期）
	大会総務	田中 康彦（32 期）、高草木　浩寿（33 期）
競　　技　　委　員	運営委員長	宮下 今朝芳（20 期）
	ディレクター	森岡　進（29 期）
	アシスタント・ディレクター	篠原 啓一郎（30 期）
	会　　計	篠原 啓一郎（30 期）
	レフリー	篠原 啓一郎（30 期）
	運営委員	欠(1 期)、欠(2 期)、欠(3 期)、欠(4 期)、 松本 勲(5 期)、欠(6 期)、龍岡 資臣(7 期)、 笠井　健介(8 期)、高間 庄一(9 期)、欠(10 期)、 児玉 和敏(11 期)、松本 圭介(12 期)、 湯川 正修(13 期)、北村 善信(14 期)、 加藤　三千夫(15 期)、鴨木 敬直(16 期)、 横山 俊昭(17 期)、原田 幸治(18 期)、 塚本 賢二(19 期)、千川 一司(20 期)、 村田 康二(21 期)、道上 正邦(22 期)、 坂口 敏朗(23 期)、池川 昭司(24 期)、 大倉 育信(25 期)、佐藤　末明(26 期)、 荒木 淳一(27 期)、鶴田 眞一(28 期)、 森岡 進(29 期)、篠原 啓一郎(30 期)、 飯田　康紀(31 期)、田中 康彦(32 期)、欠(33 期）、 欠（34 期）

【お知らせ】

　第２９回大会は令和８年５月に有明テニスの森公園での開催を予定しています。皆様奮ってご参加いただきますよう同窓会一同お待ちしております。参加を希望される方は各期運営委員へ、または期生会を通じてお知らせください。

（事業部　３３期空　高草木　浩寿　記）

◇第２７回防衛大学校同窓会ゴルフ大会（結果）

2025.11.27

２７回目を迎えた恒例のゴルフ大会は、今年も千葉カントリークラブ川間コースにおいて、シニ アの部（１４期生～２３期生）が１０月３１日（金）に、レギュラーの部（２４期生～３３期生） が１０月２４日（金）に開催されました。両日ともに天候に恵まれ、熱戦が繰り広げられました。【シニアの部】シニアの部は、総勢８８名が参加し、各期上位５名のネット成績で争われました。また、中尾副 会長が大会会長代理として参加しました。団体戦（ネット）は、１９期生が優勝の栄冠を手にし ました。また、１４期生、１５期生、１６期生、及び１７期生は今回が最後の大会参加となりました。成績は、次のとおりです。

期　別		NET	
	SCR	AVE	順　位
１４期	380.6	76.1	6
１５期	378.8	75.8	5
１６期	381.6	76.3	7
１７期	373.4	74.7	2
１８期	387.0	77.4	10
１９期	365.4	73.1	優勝
２０期	374.8	75.0	3
２１期	385.8	77.2	9
２２期	376.4	75.3	4
２３期	382.0	76.4	8

個人戦（ネット）は、１９期生 武富 龍治さん（スコア：７０．６（ＨＣ８．４））が優勝し ました。また、個人戦（グロス）の各コースのベストグロスは、次の方が獲得しました。・東南コース：２１期生 工藤 誠律さん（スコア：８１）・南西コース：１５期生 田母神 俊雄さん（スコア：８５）・西東コース：１９期生 武富 龍治さん （スコア：７９） １期生から寄贈された個人総合ベストグロス賞のカップは、１９期生 武富 龍治さんが保持者 となりました。

シニアの部 参加者集合写真（１４期生～２３期生）

中尾副会長 開会挨拶

競技委員長からの競技説明

団体の部 優勝（１９期生）

個人の部 各コースベストネット賞

個人の部 ベストネット賞

個人の部 ベストグロス賞

本大会で引退される１４期生

本大会で引退される１５期生

本大会で引退される１６期生

本大会で引退される１７期生

【レギュラーの部】
レギュラーの部は、総勢８９人が参加し、各期上位６人のグロス及び各期上位５人のネットの成績で争われました。また、丸茂会長が大会会長として参加しました。
団体戦では、グロス、ネットともに優勝２８期生、２位２７期生、３位２４期生と、上位３コ期が同じになるという異例の結果となりました。成績は次のとおりです。

期 別	GRS			NET		
	SCR	AVE	順位	SCR	AVE	順位
２４期	526	87.7	3	372.6	74.5	3
２５期	526	87.7	4	377.4	75.5	6
２６期	573	95.5	7	385.0	77.0	9
２７期	520	86.7	2	371.4	74.3	2
２８期	495	82.5	優勝	366.8	73.4	優勝
２９期	528	88.0	5	375.0	75.0	4
３０期	555	92.5	6	375.6	75.1	5
３１期	573	95.5	8	380.2	76.0	7
３２期	―	―	―	392.2	78.4	10
３３期	592	98.7	9	384.0	76.8	8

個人戦（ネット）は、２８期生 池田 秀人さん（スコア：７０．８（ＨＣ１３．２））が優勝しました。
また、個人戦（グロス）の各コースのベストグロスは、次の方が獲得しました。
・東南コース：３０期生 益子 卓さん （スコア：８０）
・南西コース：２９期生 高田 昌樹さん （スコア：７８）
・西東コース：２８期生 佐野 佳幸さん （スコア：８１）
優勝した期に送られる優勝キャップのグロスの部、ネットの部の二組は、一度２８期生に授与されましたが、２８期生の申し出により、一組は防衛大学校時代に“大変お世話になった”２位であった２７期生に送られました。大変、心温まるシーンでありました。

レギュラーの部 参加者集合写真（２４期生～３３期生）

丸茂会長 開会挨拶

競技委員長からの競技説明

団体の部 グロス・ネット 優勝（２８期生）

個人の部 ベストネット賞

個人の部 各コースベストグロス賞

個人の部 各コースベストグロス賞

個人の部 各コースベストグロス賞

２８期から２７期にキャップ進呈

丸茂会長の閉会挨拶

２０２６年度大会につきましては、今年度同様の１０月下旬から１１月上旬での開催を予定しています。
（事業部 ３２期 陸 西川 亘、３３期 陸 古庄 信二、３４期 陸 平野 邦治記）

◇第２５回防衛大学校同窓会囲碁大会 （結果）

2025.11.26

第２５回防大同窓会囲碁大会が令和７年１０月１８日（土）、日本棋院本院（東京市ヶ谷）１階対局場において開催され、全国から６２名の同窓生が参加しました。

　第２４回大会と同様、５名以上の期、４名以下の期でグループ分けした期別対抗で行われました。期で４名を確保できない場合は混成チームを編成し、５名以上のチームで参加しています。
　競技は異なる期で４名１グループ、２個グループ８名の組を編成し、グループ内で総当たり３回戦を行います。その後、各グループの同順位同士による４回戦を実施し、全対局終了後、期ごとの勝ち数で順位が決定されます。

大会運営は
・大会会長　　納冨副会長（29 期）
・競技委員長代理　村松來多郎（18 期）
・競技副委員長　　清水聰一　（４期）
・当番幹事　　北村義明　（22 期）
・大会総務　同窓会囲碁担当２名 （ 33･34 期）
の体制で行い、大会は計画どおり進行しました。

　なお、来年度から、競技委員長が高比康之（１期）から村松來多郎（18 期）に、競技副委員長が清水聰一（４期）から忽那学（20 期）に、それぞれ交代予定です。

　開会式では村松競技委員長代理が、本年も多数の参加者をもって大会が開催できた旨の挨拶の後、北村当番幹事より競技ルールの説明が行われました。

開会式における村松競技委員長代理挨拶

北村当番幹事による競技ルール説明

競技の対局時間 80 分、選手の持ち時間一人 40 分(切れ負け)、オール互先、先番 6 目半コミ出しで実施されました。開始前の寛いだ雰囲気から対局開始序盤は、静かな会場に選手が碁盤に石を打つ音だけが響いていました。対局が進むにつれ、早く終わった選手は談笑したり、他の対局中の試合を見守ったり徐々に賑やかになりましたが、終始和やかな雰囲気の中で競技は進行しました。

対局開始前の寛いだ雰囲気　　対局開始、序盤の様子

対局中盤から終盤の様子　対局を終え他の対局を観戦したり、終局後時間まで再度対局する選手

納冨副会長（大会会長）が会場到着後、村松競技委員長代理、北村当番幹事に挨拶、懇談され、 村松委員長代理から同窓会の大会である囲碁大会への支援に感謝の意を表され、納冨副会長からは大会の開催と盛会についてお祝いを述べられました。

競技委員長代理、当番幹事と大会会長との懇談

大会後半の模様

閉会式では、大会会長から各グループの優勝チーム及び全勝した選手に賞品が授与され、最後に大会会長が「休憩時間も少ない時程で、80 分もの対局を 4 回戦戦い抜く気力と熱意に敬意を表すると共に、全国から多数の参加者が集まり親睦を深めていることに感銘を受けました。また、村松競技委員長代理、北村当番幹事をはじめとした大会役員、全国各地から参加された選手の皆様に感謝いたします。」と挨拶され大会は終了しました。

賞品の授与（全勝者）

大会会長講評

大会結果は次のとおりです。

・期別対抗　５名以上チーム：優　勝　　６期

準優勝　　９期

３　位　　７期

４名以下チーム：優　勝　１６期

準優勝　２２期

３　位　　４期

・全勝者 山口進(6 期) 、庄山正気(9 期) 、日暮正博(16 期)、村松来多郎(18 期)、郷田進(19 期)

５名以上の部優勝：　６期

４名以下の部優勝：１６期

第 26 回大会は令和 8 年 10 月 17 日(土)に開催予定です。

多くの同窓生の参加をお待ちしています。

（33 期 海 髙橋賢悟、34 期 海 富山 修 記）

◆連絡事項

防衛大学校同窓会 本部役員名簿

(2025.10.1 現在)

職 名		氏 名	期	要員
会 長		丸茂 吉成	27	空
副会長		納冨 中	29	陸
		中尾 剛久	29	海
		城殿 保	29	空
理 事	事務局長	鵜居 正行	31	陸
		中畑 康樹	30	海
		後藤 雅人	31	空
	防大教授	竹平 哲也	30	空
	統幕総務部長			
	陸幕監理部長	今井 俊夫	40	陸
	海幕総務部長			
	空幕総務部長	市川 佳弘	39	空
会計監事		河本 宏章	28	陸
		間瀬 元康	28	陸
		橋口 信吾	29	海
		藤永 映章	27	空

代議員等名簿

8.3.1 現在

期	期生会会長		代議員			業務幹事	
	氏　　名	要員	陸: 氏　名	海: 氏　名	空: 氏　名	氏　名	要員
1	深山　明敏 (※)	陸					
2	高岩　利彦 (※)	陸					
3	野本　眞二 (※)	陸					
4	金田　孝之 (※)	陸					
5	大橋　武郎	空	久光　禧敬	桑原　俊介	齋藤　賢爾	浅野　勇蔵	陸
6	福塚　啓二(※)	海					
7	杉田　明傑(※)	陸				中村　曉(※副)	陸
8	藤縄　祐爾	陸	廣澤　澄晴	梶浦　邦夫	篠田　雅夫	山崎　幹夫	陸
9	中野　正治 (※)	空					
１０	石飛　勇次	陸	山本　忠文	坂東　勝昭	川田　哲雄	山本　忠文	陸
１１	役員指定なし						
１２	田内　浩	海	藤本　四郎	鈴木 友久	槁本　康夫	小鮒　光平	海
１３	内山 好夫	空	篠田　芳明	新宮領　篁	花岡　芳孝	佐藤　公彦	空
１４	河野　芳久	陸	寄田　修	齋藤　隆	稲葉　憲一	高橋　健二	空
１５	林　直人	陸	瓦谷　育夫	平山　為祥	江口　啓三	佐藤　誠喜	陸
１６	折木　良一	陸	石川　由喜夫	橘　恒紀	源　外志明	石川　由喜夫	陸
１７	赤星　慶治	海	鈴木　陽	赤星　慶治	永田　久雄	石村　澄雄	海
１８	火箱　芳文	陸	植木　美知男	色川　喜美夫	長尾　齊	植木　美知男	陸
１９	岩﨑　茂	空	師岡　英行	宮浦　弘兒	下平　幸二	風間　敏榮	陸
２０	佐藤　貞夫	陸	西村　智聡	加藤　耕司	渡邊　至之	今井　惠治	陸
２１	河野　克俊	海	荒川　龍一郎	山本　高英	小野田　治	山本　高英	海
２２	宮下　寿広	陸	田原　昭彦	畑中　裕生	福井　正明	石野　貢三	空
２３	岩田　清文	陸	藤井　貞文	福本　出	清藤　勝則	岩﨑　親裕	陸

２４	杉山　良行	空	武内　誠一	原田　哲郎	半澤　隆彦	半澤　隆彦	空
２５	高鹿　治雄	海	岡部　俊哉	池田　徳宏	吉田　浩介	徳丸　伸一	海
２６	尾上　定正	空	深津　孔	堂下　哲郎	尾上　定正	池畠　暢也	空
２７	小林　茂	陸	小林　茂	大塚　海夫	橋本　尚典	穂積　文孝	空
２８	田浦　正人	陸	田浦　正人	真鍋　浩司	渡邊　博史	田浦　正人	陸
２９	馬場　邦夫	陸	中村　浩之	中尾　剛久	村上　和彦	時藤　和夫	空
３０	堀切　光彦	陸	山﨑　繁	時久　寛司	上ノ谷　寛	篠原　啓一郎	陸
３１	前田　忠男	陸	山口　和則	今村　靖弘	後藤　雅人	山口　和則	陸
３２	阿部　睦晴	空	池田　頼昭	梶元　大介	柴田　利明	植村　茂己	空
３３	中塚　千陽	空	山根　寿一	藤沢　豊	沖野　克紀	沖野　克紀	空
３４	佐藤　信知	空	荒井　正芳	福田　達也	小笠原　卓人	小笠原　卓人	空
３５	稲月　秀正	空	戒田　重雄	伍賀　祥裕	吉村　一彦	熊谷　三郎	空
３６	寺﨑　隆行	空	松永　浩二	石巻　義康	寺﨑　隆行	松永　浩二	陸
３７	宇佐美　和好	空	小川　隆宏	浦口　薫	宇佐美　和好	宇佐美　和好	空
３８	石井　浩之	空	浅賀　政宏	濱﨑　真吾	白井　亮次	山﨑　武志	空
３９	湯下　兼太郎	陸	湯下　兼太郎	平田　利幸	中川　一	湯下　兼太郎	陸
４０	清水　徹	海	梨木　信吾	川野　邦彦	石引　大吾	兵庫　剛	陸
４１	堤田　和幸	海	小林　貴	堤田　和幸	中谷　大輔	堤田　和幸	海
４２	内藤　亮	海	山下　一友	佐瀬　智之	富川　輝	磯貝 充貴	海
４３	鎌田　淳	空	澤　繁実	江畑　泰孝	志津　雅啓	志津　雅啓	空
４４	髙橋　秀典	海	鈴木　攻祐	阿部　直樹	原田　理	阿部　直樹	海
４５	青山　佳史	陸	庄司　秀明	岡澤　智和	坂田　靖弘	庄司　秀明	陸
４６	臼井洋太郎	海	菊池　裕紀	加藤　太輔	和田　夏樹	向　康司	海
４７	吉水　憲太郎	陸	清田　裕幸	笠原　健治	中里　悠花	清田　裕幸	陸
４８	柏木　祐一郎	海	桐谷　高弘	柏木　祐一郎	齋藤　真吾	柏木　祐一郎	海
４９	山上　剛史	空	松浦　秀俊	小沼　洋祐	山上　剛史	山上　剛史	空

５０	吉井　拓也	陸	益田　一宇	八木　佑己	阿部　竹浩	益田　一宇	陸
５１	鬼塚　勇	陸	鬼塚　勇	林　大佑	森嶋　倫	鬼塚　勇	陸
５２	成田　優	陸	成田　優	岡田　航	荒木　敬	成田　優	陸
５３	濵田　卓	空	江嶋　宏次	松崎　圭祐	来栖　克則	濵田　卓	空
５４	金澤　慧人	空	角丸　公康	垣内　隼斗	内藤　昌孝	金澤　慧人	空
５５	若月　豪	陸	若月　豪	中村　友哉	加治　政樹	若月　豪	陸
５６	松尾　聡一郎	陸	松尾　聡一郎	田中　結貴	舟津　貴正	松尾　聡一郎	陸
５７	我妻　国明	陸	久保　翔平	柗村　駿明	大籔　秀斗	我妻　国明	陸
５８	戸口　真	海	秋島　一弥	浦山　修太朗	河野　健	戸口　真	海
５９	屋代　昌也	陸	渡邊　一生	馬渡　淳司	宮川　啓一	屋代　昌也	陸
６０	浜野　広大	陸	田村　洋人	畠山　尚己	庄司 和正	今尾　友哉	陸
６１	久米井　勇馬	空	池上　好古	神作　友陽	工藤　将人	松本　龍二	海
６２	上中　龍基	空	神木　康誠	唐川　航輝	江打　諒馬	熊木　礼於奈	陸
６３	武石　太一	海	筒井　健司	笠原　豪	久保田　祥平	舟林　翼	陸
６４	梅村　俊海	海	須田　悠介	森田　雄也	小川　隼人	門馬　明富	陸
６５	吉田　敦	海	横山　慶次郎	坂東　渉伍	山本　悠馬	小俣　裕紀	陸
６６	細谷　涼子	海	大山　智也	佐藤　日向子	町田　光	佐地　祥太朗	陸
６７	堀越　智也	海	嶋田　透哉	髙田　虎哉	八尋　翼	堀越　智也	海
６８	佐藤　総太郎貴久	陸	小田　健人	深澤　礼香	大久保　勇志		
６９	出口　満博	陸	冨村　凱也	酒井　隆行	城河内　涼佳	佐野 暉英	海

※指定窓口会員

防衛大学校同窓会 小原台事務局員名簿

(2025.10.1 現在)

職名			氏名	期	要員	
小原台事務局	事務局長		中谷 大輔	41	空	将補
	事務局長補佐		安藤 明宏	39	海	1佐
			荒井 将人	37	空	1佐
			川口 貴浩	40	陸	1佐
	総務部	部長	中澤 信一	28	海	2佐
		補佐	鶴貝 英俊	38	空	2佐
	人事部	部長	別府 万寿博	36	空	文官
		補佐	成合 倫樹	63	海	2尉
	経理部	部長	小林 伸嘉	36	空	2佐
		補佐	山﨑 武志	38	空	文官
	事業部	部長	村上 強一	31	空	2佐
		補佐	津田 武志	45	空	2佐
			田中 あずさ	58	陸	1尉
			平田 健志	63	空	2尉
	広報部	部長	村田 秀将	43	陸	1佐
		補佐	福原 伸一	42	陸	2佐

地域支部長等役員名簿

8.3.1 現在

所属支部	役　職	氏　　名	期	要員
北海道地域支部	支部長	加藤　幸治	14	陸
	事務局長	－	－	－
東北地域支部	支部長	浅川　紀明	25	陸
	事務局長	佐藤　芳一	30	陸
栃木支部	支部長	正岡　富士夫	15	空
	事務局長	正岡　富士夫	15	空
群馬支部	支部長	石橋　輝治	5	陸
	事務局長	小島　健二	14	空
北陸地域支部	支部長	濱谷　隆平	6	陸
	事務局長	濱谷　隆平	6	陸
東海地域支部	支部長	今枝　隆昌	19	陸
	事務局長	川村　大介	25	海
関西地域支部	支部長	川瀬　昌俊	26	陸
	事務局長	澤井　宏保	31	陸
鳥取支部	支部長	吉岡　元	10	空
	事務局長	山本　洋	21	陸
島根支部	支部長	田中　秀文	35	陸
	事務局長	田中　秀文	35	陸
岡山支部	支部長	物部　明徳	22	空
	事務局長	植月　將元	22	陸
広島支部	支部長	佐藤　正志	22	海
	事務局長	土肥　弘実	25	海

山口支部	支部長	久楽　修	15	空
	事務局長	落合　直巳	21	陸
四国地域支部	支部長	山崎　忠雄	19	陸
	事務局長	松村　朝生	29	陸
徳島支部	支部長	山崎　忠雄	19	陸
	事務局長	新居　久佳	24	陸
香川支部	支部長	宇草　茂	18	陸
	事務局長	松村　朝生	29	陸
愛媛支部	支部長	萬家　順一	26	海
	事務局長	津田　敦彦	38	空
高知支部	支部長	依光　賢三	32	空
	事務局長	－	－	－
九州地域支部	支部長	野田　文久	24	陸
	事務局長	田代　勉	25	陸
福岡支部	支部長	野田　文久	24	陸
	事務局長	田代　勉	25	陸
佐賀支部	支部長	大塚　元幸	26	陸
	事務局長	内竹　英俊	28	陸

長崎支部				
	事務局長	広井　豊明	21	海
熊本支部	支部長	光永　邦保	22	陸
	事務局長	阿部　健司	19	陸
大分支部	支部長	藤田　太	20	陸
	事務局長	山﨑　真一	32	陸
宮崎支部	支部長	川﨑　朗	24	陸
	事務局長	黒木　忠広	27	海
鹿児島支部	支部長	紫村　敬二	18	陸
	事務局長	樺山　一孝	29	陸
沖縄支部	支部長	渡名喜　邦夫	21	海
	事務局長	－	－	－
小原台クラブ	会長（支部長）	宮田　晃	25	海
	事務局長	及川　正稔	28	陸
桜華会	会長（支部長）	塚口　千枝（平松）	40	陸
	事務局長	嶋津　悠加（黒田）	45	空

防衛大学校同窓会 本部事務局員名簿

（ＳＡ：専門アドバイザー）　　（2025.11.21 現在）

職名			氏名	期	要員
総務	部長		小谷 琢磨	32	陸
	副部長		石田 伸介	32	海
			川波 清明	32	空
	担当	総務新規事業	篠村 和也	33	陸
			伊藤 幸二	33	陸
			澤崎 伸二	33	陸
			高田 充	33	海
			樋山 謙一郎	33	空
		国際交流支援	大戸 英円	33	陸
			阿蘇 晋一	33	空
	担当補佐	総務会議運営新規事業	松坂 晋一	34	陸
			田中 一要	34	陸
			吉野 宏昭	34	海
			阿部 康彦	34	空
		国際交流支援	江頭 真一	34	陸
			佐藤 信知	34	空
			坂尾 陽子	常勤	
人事	部長		福重 毅尚	32	陸
	副部長		木場 隆治	32	空
	ＳＡ		芳賀 基	32	海

	担 当	木戸 泰雄	33	陸
		小山 雅弘	33	海
		大谷 康雄	33	空
	担当補佐	蛯原 明裕	34	陸
		木村 雅樹	34	海
		小林 昭洋	34	空
経 理	部 長	深谷 徳彦	32	陸
	副部長	本山 泰之	32	海
	担 当	堤 浩一郎	33	陸
		田村 久幸	33	海
	担当補佐	山根 浩佳	34	陸
		塩見 伊佐夫	34	空

事 業	部 長		榮村 佳之	32	陸
	副部長		山越 博道	32	海
	ＳＡ		西川 亘	32	陸
	担当	HCD/HVD	宮本 芳昌	33	陸
		HCD2	岸本 昌之	33	海
		テニス/支部	高草木 浩寿	33	空
		囲碁等	高橋 賢悟	33	海
		ゴルフ/講演	古庄 信二	33	陸
	担当補佐	HCD/HVD	西川 正晃	34	陸
		HCD2	大内 研治	34	海

		テニス/支部	芳賀 和典	34	空
		囲碁等	富山 修	34	海
		ゴルフ/講演	平野 邦治	34	陸
広 報	部 長		小暮 幹太	32	空
	副部長		川崎 誠二	32	陸
			八木 聖一郎	32	陸
	ＳＡ（システム事項）		時藤 和夫	29	空
	ＳＡ		生田 孝治	31	空
			和田 政	32	空
	担当	ＨＰ	工藤 武	33	空
			石井 信	33	陸
		機関紙	嶋本 学	33	陸
			佐川 浩彦	33	空
		人材バンク	末廣 和祥	33	陸
			下濱 昭博	33	海
	担当補佐	ＨＰ	依田 和彦	34	空
			飯塚 友嗣	34	陸
		機関紙	川野 静生	34	陸
			相方 一宏	34	海
		人材バンク	丹羽 満良	34	海
			小松 広志	34	陸